

# 北 どころ本

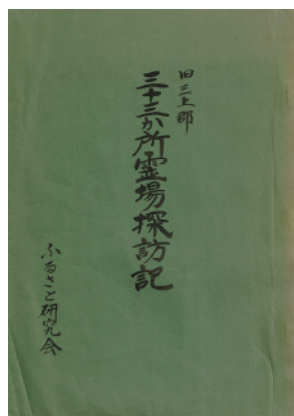
第31号 2018年10月1日（毎月1日発行）

## 旧三上郡三十三か所霊場① ふるさと巡礼地を訪ねて

その本に出逢ったのは、資源ごみの集積場所だった。紐でくくられた本の束の一番上に、古びたわさび色の表紙の冊子があった。「三十三か所霊場」という墨書が読み取れた。おそらく、古本屋を開業する前のわたしであれば、興味もなくそのまま見過ごしていただろう。

本を抜き取ってばらばらとめくって読むと、手書きの文字を印刷して製本している。巻頭では、郷土史家として著作も多い増原卓三さんが「ふるさと研究に寄せて」という一文を寄せている。貴重な資料本だと判断して、店に持ち帰った。

本の正式なタイトルは「旧



三上郡三十三か所霊場探訪記」、編纂したのは「ふるさと研究会」、発行は一九八三年三月。解説文によると、旧三上郡とは庄原市（合併する前の旧庄原市）が誕生するまでの庄原町、敷信村、本田村、高村を一括した藩政時代の郡名である。その三上郡に三十三か所の札所が設定されたのは、江戸時代の中頃頃ではないかと増原さんは推測している。庶民の間に観音信仰が盛んだった時代である。

観音信仰といえ、西国三十三か所霊場が有名だが、簡単には旅行ができなかった時代である。土地を離れるのに許可がいるし、交通手段も乏しいので多額の費用と日時が必要だ。庶民には高嶺の花で、どうしても巡拝したいという悲願が、全国各地に代用の巡礼地を誕生させた。ちなみに三十三か所とは、観音の三十三変化に由来している。「観音経」では、観音菩薩が娑婆世界を遊行し、そのときど



第一番札所・龍福寺

きに三十三種類の姿に変化して人々を救済すると説かれている。

本書が編纂されるきっかけになったのは、佐々木米蔵さんという篤信の一農夫が遺した一冊の手記。米蔵さんは生前、毎年春の彼岸には、その手記である「御詠歌」本を手に、一人庄原市内にある旧三上郡三十三か所の札所を巡拝していたという。御詠歌とは、一般信徒が寺院・霊場巡礼の際に詠唱する和歌で、各札所には独自の御詠歌の額面が掲示されている。

時代の波に埋れた庶民信仰の歴史をたどってみたい――、  
「ふるさと研究会」のメンバーの奮闘が始まった。手がかりは米蔵さんの手記だけ。その手記も、幾か所か不明の部分がある。  
「倒壊したお堂からようやく御詠歌の額面を発見し、場所が不明だった霊場（板橋・永専庵）を確認し得た感動。足を棒にして右往左往の場所探し。ふと交わした会話から、偶然出会った人の口から場所を知り得たものもいくつかあった。」  
まさに「探訪記」である。どうしても場所を特定できなかった札所が「一か所残るが（春田・東光坊）、こうして探索の成果が一冊の本としてまとめられた。わかりやすいように、札所の一覧表や所在地の地図が掲載されている。  
一級品の郷土資料として、どら書房の店内に陳列していたのだが、後日、常連客である上田輝馬さんが、「ふるさと研究会」のメンバーであり、冊子の文字を記した本人であることが判明、改訂版のまだ製本されていない冊子のコピーをいただいた。縁（えにし）という言葉が心に浮かんだ。  
これらの資料は、店内の郷土資料コーナーに陳列している。この棚の本は販売ではなくすべて閲覧専用（貸出しも

可)。郷土資料の保全の重要性に気づかせてくれたのが、「旧三上郡三十三か所霊場探訪記」(以後探訪記と略称)なのである。

旅行に行くこと、よく似た風景に出会うことが多い。コンビニやチェーン店が増殖している現在はおさらだ。しかし、その土地の歴史や文化、伝承されている物語を知ることで、平凡な景色は一変する。それが自分のふるさとであればなおさらだ。朽ちた建物や石木でさえ、意味あるものとして輝いて見える。歴史や文化はふるさとの礎であり、最後の砦である。

祖先が巡拝した札所をいつか自分も訪問してみたい、そんな思いを抱くようになってきた。どうせやるなら、現在の札所の姿を誌面でレポートしたい。長い前置きでしたが、これから巡礼の旅が始まります。大雨、台風、地震……、亡くなられた方々の鎮魂と、これからの息災を祈願します。

## 第一番札所 如意山龍福寺

いやましに袖をつらねて諸人の麓の寺にはこぶあゆみを  
(さあいよいよこれからみる)

なで一緒に里の寺々への巡拝に歩いて行こう)

所在地は庄原市小用町、宗旨は臨済宗で本尊は聖観音菩薩。以下は探訪記からの抜粋。

明治十八年(一八八五)秋の雷による火災で本堂を全焼、寺の歴史を刻む資料の大半が焼失したため、創建の年代は定かでない。元亀元年(一五七〇)に甲山城主の山内隆通が再建した。六代住職桃木禅師の享保三年(一七一八)に真言宗から臨済宗妙心寺派に改宗した。享保十九年(一七三四)ごろ、裏山が崩れ、寺が壊れたとき、和尚の夢まくらに観音さまが立ち、山崩れと避難を告げられたという伝えが残る。

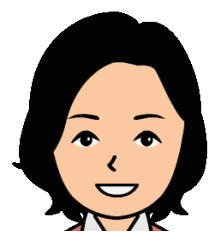
十一代住職の春応禅師は北備三名僧といわれ、龍福寺住職から禅寺では最高の京都妙心寺館長になった。(中略)住職時代の文政初めにしたためた大般若経の直筆百五十巻と七十一歳のときに寺に贈った「龍福寺」の額は寺宝として保管されている。

(中国新聞掲載、県北の「社寺」による)

お城を連想させる石垣の上に立つ龍福寺は、立派な山門や鐘楼を備えていて、まさに

新・図書館員ノート「思い出の一冊」⑦

## 遊びの天才「ばばばあちゃん」



幼いころからがんば(やんちゃ)だった私。いつも近所の子と一緒に、昆虫を探しに道なき道を探検することが大好きだった。そんな私が母になり子供と楽しんで絵本は、さとうわきこ/作『ばばばあちゃんのお話シリーズ』(福音館書店)。中でも3作目『あめふり』がお気に入りであった。

毎日雨が降り続くことに怒ったばばばあちゃん。空の上のおにの子たちをこらしめようと、仲間動物たちと一

緒に暖炉やストーブに薪をくべて、こしょうやとうがらし入りのからいからい煙を作って空へ。すると、おにの子たちがたまらず「ハックション」。あんまり大きなくしゃみを何度もしたので、雲がちぎれて、おにの子たちも雲も地上の泥水に落っこちて…。

いつも読み終わった時に、気持ちが悪くスッキリし、親子で笑顔になれるこの絵本。怒ったり笑ったり、ちよっぴり口が悪いおばあちゃんだが、なぜだか憎めない。

どの作品も、びっくりする発想と展開が楽しくて、夢中になって読んでいた。もしかしたら、子供たちより私が、遊びの天才ばばばあちゃんファンだったのかも知れない。

しばらく行ってない山遊びに、また行きたくなってきた。

(三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作)



「古刹」という雰囲気。探訪記には「御詠歌の額面現存せず」と記されているが、本堂正面入り口の上部に額面が掲げられている。これは現在のご住職が子供のころ、床に転がっていた額面を見つけて当時の住職だった父親に報告、今の場所に掲げられたという経緯がある。

三十三か所霊場についての資料や伝承はないでしょうかと確認したが、「何もありません」と即答だった。話題になったこともないようだ。



龍福寺の御詠歌の額面

### 第二番札所 野谷 観音寺

所から駒もいさむやくら造り山の  
こなたに寺ちかく見ゆ

(道が険しくなってきた所なので馬の鞍綱を締め直そう。私たちが向かっている山の正面にありがたくも目指す観音寺が見えてきたよ)

残念ながら、観音寺はもはや存在しない。すでに芸藩通志(広島藩の地誌)にも廃寺と記録されている。

しかし、庄原市本村町野谷に、御詠歌の額面を掲げた観音堂が残っている。

野谷というと、ピラミッドが有名だ。昭和九年(一九三四)ピラミッドの研究家酒井勝軍が巨石群のある葦嶽山を調査して、山頂から太陽石と、それを取り巻く磐鏡(いわさか)を発掘。世界最古のピラミッドであると発表して大きな話題になった。

葦嶽山の登山口付近の民家で、観音堂の場所を尋ねた。その方は、しばらく考えられていたが、案内してあげましょうと言って立ち上がった。恐縮して、場所だけ教えてもらえればいいですからと辞退したが、わかりにくいですからと言われ、厚意に甘えることにした。

総領に向かう旧道を車で登って、途中の山林の中に分け入った場所に観音堂はあった。農道を歩いて小さな沢を渡り、「この辺にあったはずなんだがなあ」と、植林された林の中を探索して、ようやくたどりついた。案内してもらって本堂によかった。

「昔は神石に向かう峠道が通っていて、観音堂の前には広場があつて、父親の代にはここで盆踊りをしていたものです」

案内してくれた七十年配の男性はそう話してくれた。観音堂の棚に立てかけられた御詠歌の額面は、白墨の文字が鮮明に残っていて、後年に修復されたのだろうか。朽ちた観音

像の胸から上の部分が安置されている。不釣り合いな小さな手が肩口に差し込まれているので、千手観音菩薩なのかもしれない。

### 第三番札所 岩戸山 岳音寺

紫の雲間にもるるがくおんじあか  
きみ山に見ゆるとうとき

(おめでたい紫の雲の光が山を明るく照らしている。その雲の間にほら岳音寺が見えるよ。ありがたいことだ)

所在地は庄原市本村町、岩戸山の西麓にある。宗旨は曹洞宗で本尊は釈迦牟尼如来。

御詠歌は境内の仁王堂に掲げられているが、ご住職の許可を得れば、お堂の扉を自分で開けて、拝観する

ことができる。

昭和初期に編集された郷土調査(本尋常小学校)の記述が、探訪記で紹介されている。

岳音寺二王像 口碑に運慶作と言ひ伝えらる丈六尺威風凛々として聳峠空を凌ぎ神氣旺盛眼光人を射る真に技工の名手の作にして凡人の作にあらざるを知る稀有の霊体なり 伝え言ふ其の年三谿郡灰塚の孝子八之助母の病氣平癒を祈願断食して二王尊に祈り遂に全快したり 霊験顕著にして参詣者跡を絶たず

三十三か所霊場についてご住職に尋ねたら、「御詠歌で当寺が三番札所であることは知っています。資料は何も残っていません」との答えが返ってきた。



野谷 観音堂



岳音寺の仁王堂の祭壇

# 宮本常一『忘れられた日本人』

## 村人への敬服の眼差し

「旅する巨人」といわれ、日本の各地、とりわけ僻地を歩き、見過ごされた暮らしの輝きを掘り起こしたのが民俗学者宮本常一『忘れられた日本人』（60年刊）です。雑誌「民話」などに書いた13編の話を集めていますが、多くが山奥の村々でごく普通に行われていたものを、聞き書きの手法で掘り起こしています。

まず、「寄りあい」について長崎・対馬での体験を書いています。

——はじめには一同が集まって区長からの話をきくと、それぞれの地域組でいろいろに話し合っただけのところへその結論をもっていく。折り合いがつかねばまた自分のグループへ戻って話し合う。用事のある者は家へかえることもある。ただ、区長・総代はきき役・まとめ役としてそこにいなければならない。こうして2日も協議が続けられる。

要約すれば以上のようなになります。3日です。宮本常一は「話がつくといいです。宮本常一は「話」といつても理屈をいうのではない。一つの事柄について自分の知っている

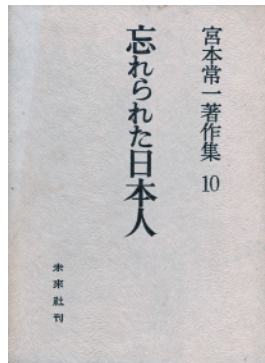
る限りの関係ある事例をあげていくのである」「反対意見が出れば出たで、しばらくそのままにしておき、その

公もその一つ、旅の文化を身につけてきて、島の人にひけらかすのが一つの誇りなのだ」と。それと同時に、「女たちは仲間の中に半可通や愚か者を仕立てつつ、それを嘲笑の対象にして、一方では自らのいましめにもしたようである」と解説しています。

### また読んでみたい本③①

#### 青年たちに

音谷 健郎



古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

【未来社版の函】

第31回は、宮本常一の『忘れられた日本人』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

うち賛成意見が出ると、また出たままにしておき、考えあい、最後に最高責任者に決をとらせるのである」と説明しています。

「女の世間」の話では、女の世渡りを聞いたままに列挙しています。たとえば、「女たちは旅へ出て行き（奉

ここには、様々な生活の知恵がうかがえます。

この作品で注目されたのが、「土佐源氏」の話です。高知県・梶原（ゆすはら）で橋の下の乞食小屋で聞いた盲目の老人の身の上話です。「わしは80年何にもしておらん。人

をだますことと、女（おなご）をかまうことです。話が始めます。老人は、はやく両親を亡くして、ばくろうになります。牛の取引の仲介です。「人をだます」とは、この時に口から出任せを言って商いをしたことを指すのです。

「それで結局、誰にもめいわくをかけん後家相手に遊ぶようになるのよ」と、そんな話を赤裸々に語りまします。その中に、官林役人の嫁さんや庄屋のおかたさん（奥さん）とねんごろになる事情が、熱を帯びて語られています。老人は「どんな女でも、やさしくすればみんなゆるすもんだな。女は男の気持ちになつていたわってくれるが、男は女の気持ちになつてかわいがる者はめつたにいな

いけえのう」と述懐するのです。これは俳優坂本長利が、一人芝居に仕立てて公演を積み重ね、1200回を迎えようとしています。

『忘れられた日本人』は、正史から抜け落ちた人々の営みの中に、どっしりとした暮らしが繰り広げられていることを証明しています。私には、「忘れられた」というより、「見過ごされた」と言った方が、合っているように思えます。次回は、柳田国男『妹の力』を取り上げます。

## トンコナン

——伝統文化を誇り高く象徴

音谷健郎

白川郷の合掌造りを思わせませす。おおく両端が突き出たひさしは、多分に装飾的で、この地方が豊かだったことを想像させます。

また、向かい合って、相似形の小型の高床家屋が建っており、こちらはネズミなどの小動物が近づけない工夫をした穀物貯蔵の米倉です。

ガイドさんの話によると、立て替へは、一族が連帯して屋根とか柱、床など分担して責任を持つ仕組みになっているという。だから、立て替へは材料が揃うのに年数がかかるのだそうだ。それでも今に引き継がれ

ているのは、この地方特有のド派手な葬礼儀式とセットになっているからです。

夕方訪れたムラでは、人影はまばらで、少女たちが太鼓を使って踊りの練習をしていました。声をかけると人なつこく、「カメラに写りたい」と、他の子どもたちも集まってきました。こちらが、現地の言葉を話せないもどかしさが残りました。

トラジャ族が住むこの地域は、山に囲まれて、長く周囲の部族とは隔絶され、農業を営んでいました。伝統的なアニミズムのアルク・トドロ

教を信奉、周囲のイスラムに対して抵抗し、20世紀に入りイスラムへの反発からキリスト教が浸透しています。現在、人口は約50万人。アラビカコーヒーの特産で知られています。

2階を見せてもらいましたが、中央の居間と北側の寝室、南の小部屋の3部屋があり、光のない薄暗い間取りでした。とがった両屋根の内側は空洞でした。居間には、水が流せて、火がたける石を据えた簡単な台所がありました。日中は、1階で過ごすようです。ただ、住まいは別にあり、葬礼儀式用にだけ残されているものもありました。昨今の暮らしでは、トンコナンは使い勝手がわるそうですが、引きつがれているのは多分に民族的な誇りだと思いました。

高地ながら水田が多く、コメは年に2・5回(2年に5回)収穫できますが、政府は年2回の収穫を奨励しているとのことでした。田植えが近づくとタウナギなどの魚を田に放ち、ムラ人を呼び集め魚を捕ってもらう風習があります。ちょうどそれに出くわしましたが、お祭り行事のような賑わいでした。田の鋤き起こしの代わりになるという効果をねらった、生活の知恵でした。

この夏、インドネシアの4番目に大きなスラウエシ(旧名セレベス)島の南西部を旅しました。タナ・トラジャという伝統文化を守っている山間の地方を訪ねるのが主な関心事でした。

トンコナンとは、高床式の豪壮な船形家屋で、この地方独特なものです。親類一族が集まり、建っています。貸切バスでこの地方の村里を走ると、今も視野のどこかにこの建物群が見えます。

船形は、先祖が北から船でやってきた記憶だといいい、正面は必ず北を向いています。1階は吹き抜けで、2階が寝室などの居住空間です。近づくで見上げるほど大きく、飛騨・



(上) トンコナンの建物群  
(右) 魚捕りをしている水田

(次号に続く)

## 虫と草木と人びとと①⑨ 中村慎吾

### 「風土記時代の中国山地の植物・その二」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

中国山地の奥深くに開発の手が伸びてきたことは砂鉄の採取が大きくかかわっている。風土記が成立して間もない七四六年、備後国敷信郷(現在の庄原市敷信町)から朝貢された鍬につけられた木簡が残されているところから見て、中国山地の砂鉄が採取されていたことは疑えない。また、「飯石(いいし)の小川 源は郡家の正東(こおりのみやけのまひひがし)一十二里(さと)なる佐久禮(さくれ)山より出て 北に流れて三屋(みとや)川へ入る。鐵(まがね)あり」と、砂鉄の産地の記述も出雲国風土記の中に散見される。恐らく砂鉄を求めて山奥く開発の手を伸ばしていたことであろう。

当時の集落や人口はどうであっただろうか。中国山地の北斜面に開けた仁多郡(にたのこおり)を例に推定してみよう。

仁多郡は三處(みどころ)の郷(さ

と)、布施の郷、三澤の郷、横田の郷の四郷から成り立っていた。大宝令で五十戸をもって一郷としていたので、それに基づく約二百戸がそれぞれの郷には里(こざと)が三つずつあったというから、十二の集落に分かれて郡域内に散在していたと思われる。三處の郷には能義郡広瀬町の比田部、三澤の郷には大原郡木次町の温泉地区が加わっている。仁多郡の郡域は現在の仁多郡より若干広いので、集落はまばらであったようである。一戸の構成員はわずか数人のもので百人以上に及ぶ戸もあつたようである。戸籍帳から算出された一戸平均二五人という数字を当てはめると約五千人が生活していたと推定される。加藤義成さん(郷土史家、出雲風土記研究の第一人者)の推計によると風土記時代の出雲国の総人口は約八万五千五百人というから仁多郡は出雲国総人口の約五・八パー

セントの人口しかない今以上の過疎の村々が散在し、狭い耕地にしがみついて暮らしていたと思われる。和名抄などにみられる古代の備後国の水田面積は平均すると九千四百七十八・七五町歩、それを換算すると、一万一千三百七十四・五ヘクタールとなる。現在の耕地面積は三万三千六百十一ヘクタールで、現在の約三・八パーセントの面積しか当時開墾されていなかったようである。このことから考えると中国山地の開墾はあまり進んでなかったと考えられ、仁多郡の推定人口五千人という数は当時の農業生産や耕地の状況から見て妥当なところと考えられる。従って、まだ、当時は深い林に覆われた山々がまだ多く残されていたことであろう。そして、それらの山々の間に耕地が拓かれ、集落が点在していたことであろう。

仁多郡の村々の状況を描写した記

述はないが中国山地の東隅、兵庫県氷ノ山の南麓の町、千種(ちぐさ)町千種の状況を播磨国風土記は「敷草(しきくさ)の村 草を敷きて神の座(みまし)と爲しき。故(かれ)敷草といふ。此の村に山あり。南の方(かた)に去ること 十里(とさと)ばかりに澤あり 二町(ふたところ)ばかりなり。此の澤に菅(すが)生(お)ふ。笠に作るに最も好し、松・杉・栗・黄蓮(かくまぐさ)・黒葛(つづら)等生ふ。鐵(まがね)を生(いだ)す。狼・熊住めり。」と伝えている。この記述から砂鉄を求めて山深く人びとは分け入り、そこに耕地を開いたが、まだ耕地の近くには未開拓の湿地が残っており、ツキノワグマやオオカミなど今では姿を消した動物も生息していたようである。耕地の周辺には深い森林が広がっていたものと推定される。仁多郡のムラの状況は千種と大同小異と考えられる。

出雲風土記には総計九十一種の植物が記されている。その数は現存する他の風土記の比ではない。中国山地にかかわりの深い飯石郡・仁多郡の場合、それぞれ三十四種が挙げられている。風土記が地理・物産・風俗などの記事を中心に編纂されたものであるから、植物は物産の一部として取り扱われ、薬用など資源植物に偏っているのは当然のこと。山野に自生しているがとりたてて有用性に乏しい植物や、森林植生の概要ま



落葉広葉樹の原生林が広がっていたと推測される。(写真はイメージ)

でそこに求めることはできないが、同じ頃、編纂された常陸国風土記の「野の土塙やせたれど紫艸(むらさき)生ふ。二の神子(みこ)の社あり。其の周(めぐ)りの山野(やまの)は、[櫟(いちい)・柞(ははそ)・栗(くぬぎ)・往々(よりより)林を成す。]や「野の北に、櫟・柴・鶏頭樹(かえるでのき)・比之木(ひのき)・往々森々(よりよりいよよか)に、自から山林(はやし)を成せり。」という記述からみて開かれた耕地の周辺にはクヌギやコナラ・クリなどのブナ科の植物に加えてカエデ類やヒノキが混じる落葉広葉樹林が「往々森々に」というように常陸国に茂っていたと推定できるように、原生の面影を多分に残した落葉広葉樹林がやはり中国山地に広く見られたものと考えられる。この記述に出雲国風土記仁多郡の条にある「禽獸(とりけだもの)には則ち 鷹・晨風(はやぶさ)・鳩・山鶏・雉(きぎし)・熊・狼・猪(い)・鹿・狐・兔・獼猴(さる)・むささび(漢字変換不可)あり」の記事を重ねてみると、中国山地は多くの大型哺乳類の生息を許すことのできたうっ蒼とした落葉広葉樹林に覆われ、原生林のままのところが多かったのではなからうか。

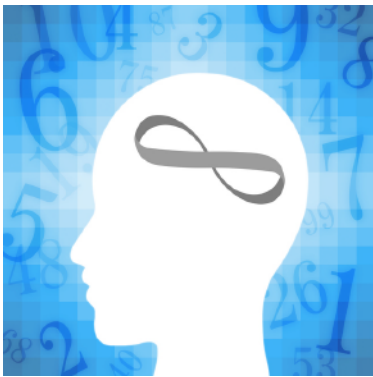
## 老いの雑記帳⑧

### 「忘れる」

ある大脳生理学者に言わせると「忘れることが多い人ほど頭が良い」そうだ。ホントかな？

後期高齢期に入ってから、極端に忘れっぽくなってしまった。地名、人名は言うに及ばず、クラシック音楽の曲名や作曲者名、名画と言われる絵画の題名や作者名、昔見た映画の題名や主演者名、等々、即座には思い出せないことがしばしばだ。「いよいよボケがはじまったか。」と悲しくなる。

ところが、冒頭に書いた学者先生の言を借りれば、「いくら頭



がいいと言っても大脳の記憶の倉庫である『海馬』にも記憶量に限度があって、忘れていかないと次のが入らない」と言うのだ。また次のようにも言っている。「単に記憶と言っても『海馬』に染み付くような強烈な記憶は忘れられないものだ。幼少の頃の火事の記憶とか、親に叱られた記憶などが忘れられないのはこの理屈だ。」と。

そう言われれば確かに昔のことはよく憶えている。それらは全て心に刻み込まれたショックとか感動があったからだ。それらは余り多くないから消されずに『海馬』に残っているのだろう。ところが最近情報は余りにも多過ぎるから次の情報が『海馬』に入れ切れずはみ出されてしまふのだ。使用済みのテープに次の録音をすると順に前の録音が消えていくのと同じなのだろう。そう考えると、人間は『忘れる』という立派な武器を持っていることになる。

「続・思いのままに〜我が心の雑記帳〜」(鈴木澄夫著)より

崖の上の天狗岩を見上げた。

「この山で修業をつんだえらい山伏さんがな、天狗になってあの岩から飛び降りたと言われておるんじゃない」

じいちゃんがそう教えてくれた。ぼくも天狗になれたら、この崖を登れるだろうか。

寒くなってきて、ムクの体を抱きしめた。クウーンとムクが甘い声を出した。右の足首がひどく痛んだ。

いつの間にか寝ちゃったようだ。ムクの吠える声で目がさめた。びっくりした。目の前に、作業服を着たおじさんが立ってるんだもん。

「おじ……さん、どこから来たの？」  
おじいさんと言いたいそうになっちゃった。短い髪の毛が真っ白だった。

「あそこから降りてきた」  
天狗岩の方を見た。

「おじさん、天狗なの？」

おじさんが笑った……、たぶんね。「ぼうずの方こそ、こんな所でどうした？」

「あそこから落ちちゃったんだよ」  
山に入り込んだムクを追いかけつけて、石か何かにつつまづいて、崖から落ちたんだ。

「おまえ凄いな。よく生きてたな」  
ほめられて、少し気分がよくなっ

た。

「途中であの木にぶつかつたみたい」  
崖の途中に低い木が生えていて、枝を広げている。

「立てるか？」  
首を振った。

「足が痛いんだ」

見せてみると言われて、ズボンのすそを持ち上げた。血止めのために巻いた白いハンカチが真っ赤になっ

でいるんだぞ」

おっかない声だった。おしっこが傷口にかかるのを見ていた。びっくりして声が出ないんだ。

おじさんは、かみつぶした草をてのひらに吐き出すと、それを傷口にたっぷり塗って、首のタオルを裂いて巻いてくれた。そのとき、ぼくの足首を少しひねったので悲鳴を上げた。

## 「天狗のおじさん」

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 29

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

ている。

「泥だらけじゃないか」

ハンカチを開いたおじさんが、怒ったような声で言った。

「ばい菌が入って、足が腐るぞ」

急に怖くなった。おじさんはそばにあった草をむしり取って口の中に放り込むと、くちやくちやくかみながらズボンのチャックを下した。

「いいか、そのまま足を伸ばしたまま

こわごわ立ち上がる。痛みが軽く

なっていた。そのまま歩いて、草むらに向った。ずっと我慢してたんだ。「腹具合が悪いのか？」

うなずいた。何かあるとすぐにおなか痛くなる。ぼくは保健室の常連だった。おじさんはまわりを探して、一本の草を摘んで来た。

「ゲンノシヨウコだ。これを食うと一発で治る」

苦いのを我慢してかみつぶして、無理やり飲み込んだ。

「腹が減ったな」

おじさんがムクの顔を見た。しっ

ぽを振っている。

「ムクというんだ」

「うまそうだな」

「食べちゃうの？」

「がきのころはごちそうだった。赤毛の犬がうまいんだ」

ムクは赤毛の柴犬だった。かくすようにムクの体を抱きしめた。

「いまはこれで我慢するか」

地面に置いたビニール袋から、おきな松茸を何本も取り出した。まわりの枯れ木や落ち葉を集めて、胸ポケットからマッチを取り出して火をつけた。タバコを吸いながら、枝に刺した松茸をあぶった。

おいしかった。いつの間にかおな



かの痛みも魔法のように消えていた。おじさんは焚火を踏みつぶして火を消すと、最後におしっこをかけた。便利なおしっこだ。いつでも出せるのかな？

「じゃあ、そろそろ行くか」

タバコの火を靴底で消すと、吸い殻を大事そうに胸ポケットに入れて立ち上がった。暗くなり始めていた。ひざまずいて、ぼくに背中を向けた。

「乗れよ」

「ぼくをおぶって、崖を登るの？」

「大丈夫、本当はおれ、天狗なんだ」

「ムクはどうなるの？」

「どこかにけもの道があるから自分で帰れるさ」

そういえば、ムクと一緒に崖から落ちていないのに、いつの間にかぼくのそばにいた。

「いやなら一人で帰るぞ」

おじさんの背中におぶさった。鉄のようにかたくてがっしりした背中だった――。

「先生、お願いします」

「わかりました。患者さんを入れてください」

パンパンと両方のてのひらで顔を叩いた。卓上の鏡に向かって、特上の笑顔を浮かべて見せる。安心こそが最高の良薬であることを、あの天狗のおじさんに教えてもらった。(それにしても、指名手配犯だったとはな)

だからあんな危険を冒したのだ。ひとりで崖を登って警察に通報、というわけにはいかなかった。

母親の墓参がしくて刑務所を脱獄したらしい。元とび職の空き巣の常習犯で、前科が七犯。ムササビの源治というあだ名を持つ、業界では有名人だったという。天狗ではなく、ムササビだった。

後年、再逮捕された源治に会うた

めに警察に消息を調べてもらったが、すでに医療刑務所で死亡していた。脱獄時には自分の死期をさどっていたらしい。

最初の患者が入って来た。電子カルテを見ると小学三年生の男子、母親が付き添っている。

「どうしました？」

「自転車で転んでしまっって」

母親が答えた。

「頭を打たなかったかな」

子供が半べその顔で、ぶんぶんと首を振った。

「痛いのは膝だけ？」

子供がコクンとうなずいた。包帯を外して、傷の状態を確認した。これくらいの擦過傷なら、抗生物質入りの軟膏を塗っておけば大丈夫そうだ。アルコール綿で傷口を消毒しようとして、源治の顔を思い出した。ほとんど痕跡も消えてしまった足の傷跡が、疼いたような気がした。

そうそう、ムクはちゃんとしじいちゃんの家に帰って来た。

「おれのことには誰にもしゃべっちゃだめだぞ。約束を破ると、ムクを食べに行くからな」

そう言って脅かされたので、天狗のおじさんのことは誰にも話していないのだ。

## まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※10月4日(水)から10日(木)まで臨時休業します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL: 090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >

# 今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「風花病棟」

帚木蓬生 著 新潮文庫

作者は、山本周五郎賞、柴田錬三郎賞等々、数々の受賞歴のある中堅作家であり、福岡県で精神科クリニックを営んでいるドクターの二刀流。現代医療の問題点を鋭く抉る社会派長編作家のイメージが定着しているが、この本は様々な科の医師を主人公にした短編集。10人のドクターが登場する。

「実際の医療現場を担うのは、名医でも悪医でもなく、『普通の良医』、「この良医は、患者にはすぐに見えない。じっくりとつき合わなければ彼らの優れたところは分からない」。作者のあとがきにある通り、仕掛けや虚飾を廃した、実直な医師のリアルな物語。だから心に沁みるのだ。



## 「六時閉店」

松村久 著 マツノ書店

出版年は平成元年、著者は今年の8月、85歳で鬼籍に入っている。山口県周南市の古書店「マツノ書店」の店主で、幕末・明治維新の史料の復刻出版などに取り組み、2007年に菊池寛賞を受賞。「六時閉店」のタイトルは、閉店時間を厳守することで、顧客におもねることなく経営理念を貫くという矜持の表明か。

少部数予約販売、稀覯本復刻出版等々、独自のスタイルで地方出版の灯を守ってきた。わがどら書房も、と思って読み始めたが、氏の「出版五原則」に自分の考えの甘さを痛感。行商、露天の古本屋から貸本屋で成功し、ブームが去ると古本屋&出版業に転じた。そうした業界の裏面史も興味深い。



## 「選択の科学」

シーナ・アイエンガー 著 文春文庫

コロンビア大学ビジネススクール教授の「選択学」。物事を選択するときどういう力学が働くのか、科学的に研究した結果を、具体的な事例を挙げながらわかりやすく解説。性別や国民性によって、選択に対する意識や判断が異なることを明らかにしている。

「専門家は（中略）自分の考えを裏付ける情報を、そうでない情報よりも、積極的に受け入れる傾向があった」、新鮮な検証が次々に登場する。人生は選択の連続だ。インドのシーク教徒の移民の子として生まれ、全盲というハンデを負った著者が、選択の力によってアメリカンドリームを体現した。選択に迷ったときの指針になりうる本である。



## どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## どろくろ俳壇

秋の蝶風に従何う振りをして

近藤 昌平

大畔を埋め尽くして彼岸花

竹地 恵美

星月夜葉書一枚出しに行く

原 博己

手頃なる重さ安値の西瓜買う

片岡 正人

柿熟れて空き家になりし妻の実家<sup>いえ</sup>

隆 愚

大尽も貧乏人も秋祭り

赤川 冬人

## 投稿&寄稿

「夜店の思い出」 M・A

実りの秋は、祭礼の秋でもある。過疎地ではお祭りもやはり人手不足で、継続に四苦八苦しているようだ。御神輿を担げるだけの体力のある住民がいないので、軽トラックに積ん

で地域を回ったり、アルバイトを雇って神輿を担いでもらったり……。

私が子供の頃のお祭りは人出も多くて、活気に満ちていた。夜に観た神楽の迫力は今でも鮮明に覚えている。演題は八岐大蛇（やまたのおろち）で、白煙を吐く大蛇の禍々しい眼光に威圧されて震えていた。

※投句を歓迎します。

いちばんの楽しみは夜店の屋台だった。今の祭りでは、夜店の屋台がほとんど姿を消してしまった。少子化でお客が減って、採算が取れなくなつたからか。1991年に施行された暴力団対策法で、テキヤに対する規制が強化されたからだろう

か。後継者不足もあるのだろう。一般市民がボランティアで屋台をやるケースも増えているようだが、プロとアマの差は歴然で、装備も含めて本職は、お客を愉しませるコツを心得ている。

熱中していた夜店がある。正式名称は知らないが「型抜き」という遊び。小さな長方形の練り粉の板に、さまざまな型が刻印されている。それを針（昆虫標本などに使う虫ピン）を使って抜き出して完成させるというルール。成功すれば賞金がもらえるという記憶があるのだが、それだと立派なギャンブルなので、賞品の勘違い？ たぶん、おおらかな時代だったのだろう。

一枚十円で、難易度を自分で要求できる。ハイリスクハイリターンで、難易度の高い方が賞金（賞品？）が高い。簡単なのは、動物などのずんぐりした型で、難しいのは細い部分が多い型。とくに覚えているのは、

傘が開いた模様の型で、柄の部分が細くて長く、虫ピンでチマチマ削るように掘り出しても、大概是途中で折れてしまう。失敗したら口の中に放り込んでバリバリ、そのときのハッカの味が今でも口の中に残っている。

型の板を買うときに、テキヤのおやじさんがサービスで、ある程度、型を折り取って手助けしてくれる。細い箇所も無造作にベキベキと折り取って行く鮮やかな指さばきを、あこがれの眼差しで眺めていたものだ。今でも縁日などで夜店が出ていると、「型抜き」の屋台が出ていないかと探している自分がいる。しかし、大人になってからは、再会を果たしていないのだ。



県北名作館④（※過去に発表された作品を紹介）

## 「のぞき」の話 第4回

あきら  
米花 斌

Aさんの巡業範囲は広がった。広島、島根両県一円を回った。岡山県哲西町矢田の金毘羅宮の秋祭りにも出掛けた。道具類を大八車に積んで、山を越えて運ぶので、並みだいての苦労ではなかった。鉄道が着いてからは汽車で運んだ。中国山地一帯は雪が深く冬季は巡業を休んだ。廃業後、あの豪華な絵看板はどうなったのであろうか。

「ああ、あれですか。しばらくもつとりましたが、あんまり頼むんで、二十一年に全部サーカス団へ売りました。」

未亡人の話に民俗研究家の山本慶一さん（倉敷市）は「惜しいことを」と残念がる。同氏の調査によれば九年にはもはや関西では大阪に一軒、神戸に二軒、姫路に一軒の合わせて四軒しか残っていなかった。

「からくり」の歴史は古い。もとは「絡

線」の字が当てられ、仕掛けなどを意味したが、後には自動装置とか糸であやつる機構なども表すようになり、「機関」「機巧」の字が当てられた。七、八世紀の正倉院御物にもからくり仕掛けの引き出しのついた碁盤がある。

「からくり」が見世物になったのは江戸中期。竹田近江が寛文二（一六六二）年に大阪道頓堀でからくり芝居を興行してから。歌舞伎の向こうを張ったこの芝居は木戸銭も安く繁盛した。この人気に目をつけ、これを模倣、小型化したのが「のぞきからくり」で、街頭に進出し、大衆化して庶民の娯楽になった。「三味線太鼓で時の流行歌を唄う。その拍子にて糸を引けば人形前に出たり後ろに引っ込んだりするばかりなりし。」天保年間のからくりについて猿猴庵は『名陽旧覧図誌』にこう評している。



「のぞき」の屋台

今のような劇画になったのは元文年間（一七三六〜四〇年）と推測される。奥村政信は「浮絵」の創始者を自認しているが、元文二年にオランダの透視画にヒントを得て、遠近を極端に誇張した人物や風景が浮いて見える「浮き絵」を「のぞき」のために描いている。彼の中村座の歌舞伎を再現した絵も、その後工夫され、人物を半肉の押し絵にしてさらに立体感を強調したり、絵の一部をくりぬいて薄紙を貼り、背後から光を当てて夜景を現出するなど、観客を夢幻の世界に誘う美しいものにした。

わずか数枚ののぞき絵が、伝統芸能として大衆の間に長く愛好されたのも、一大シネラマとして展開する絵の工夫と「のぞき節」の名調子によるもので、明治から大正にかけて全盛期を迎えた。付け加えて言うならば、葛飾北斎も浮世絵を手掛け、彼の「富嶽三十六景」はこの浮き絵の手法を基に成したもので、安藤広重の版画「東海道五十三次」の風景画も、浮き絵の画法を日本風に完成したものである。（終）

◆「ひろしま備北文学」創刊号（一九九八年七月発行）からの転載です。◆

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## — 硬式テニス参加者募集 —

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



## 第19回庄原こどもミュージカル ふしぎの国のアリス

脚本・指導・演出 / 増田 明

10/14(日)  
庄原市民会館  
大ホール

第1公演 13:30~15:00/ 開場 13:00 第2公演 16:00~17:30/ 開場 15:30

入場料 一般・小学生以上 **1,000円** 全席自由 未就学児以下無料

主催：庄原こどもミュージカル実行委員会 お問い合わせ ☎090-2006-6982  
チケット取扱所：

- ジョイフル2F サービスカウンター ●庄原市民会館 ●サングリーンサービスカウンター
- 小池書店 ●庄原市西城保健福祉総合センター「しあわせ館」 ●児玉医院(川北町)
- 庄原・三次市内の中国新聞販売所他

## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集 ●教室&講座案内
- イベント情報 ●あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## — 絵本の無料レンタル —

イベントや集会の時などにお使いください。

「箱貸し」します。

図書館の除籍本や販売には難のある本ばかりなので、破損しても大丈夫です。

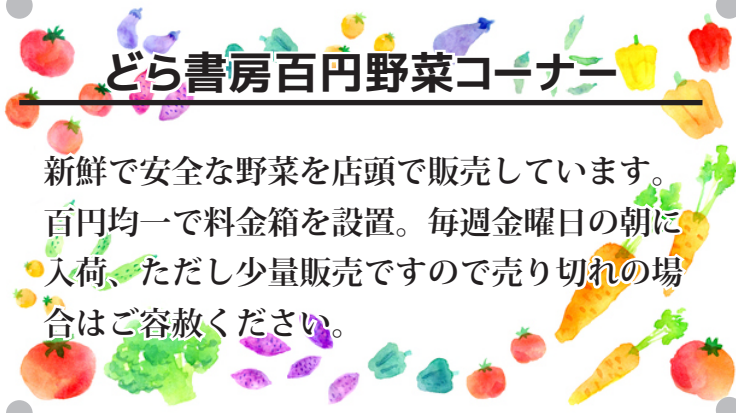
ご希望の方はどら書房まで。

## どら書房百円野菜コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売しています。

百円均一で料金箱を設置。毎週金曜日の朝に

入荷、ただし少量販売ですので売り切れの場合はご容赦ください。



発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail: touzin@sannet.ne.jp  
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン: ROUTE183  
協賛：九日市愛好会

後までお付き合いください。最新情報がありましたらご連絡ください。とくに所在地不明の春田町・東光坊に関する情報を募集します。

◇音谷さんの紀行連載は、旅行の土産話がとてもおもしろいので、ぜひ書いてくださいとお願ひして実現しました。上、中、下と三回の予定です。

◇先月号の現代御伽草子「ウルトラS探検隊」で、「ベトコンの隊商」は「ベドウィン」の隊商の間違いです。訂正させていただきます。

## 編集後記

◇今月号も2ページ多い特大号です。巻頭の「旧三上郡三十三か所霊場」は以前から考えていた企画で、秋の彼岸に札所巡りをスタートしました。不定期の連載になりますが、最後までお付き合いください。

第 213 回

# 「庄原九日市」

平成30年

10月9日(火) 9:00~13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。  
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

## TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

➡ 第14回絵手紙大賞作品展  
とき：10月8日(月)～10日(水) 10時～16時

★どら書房

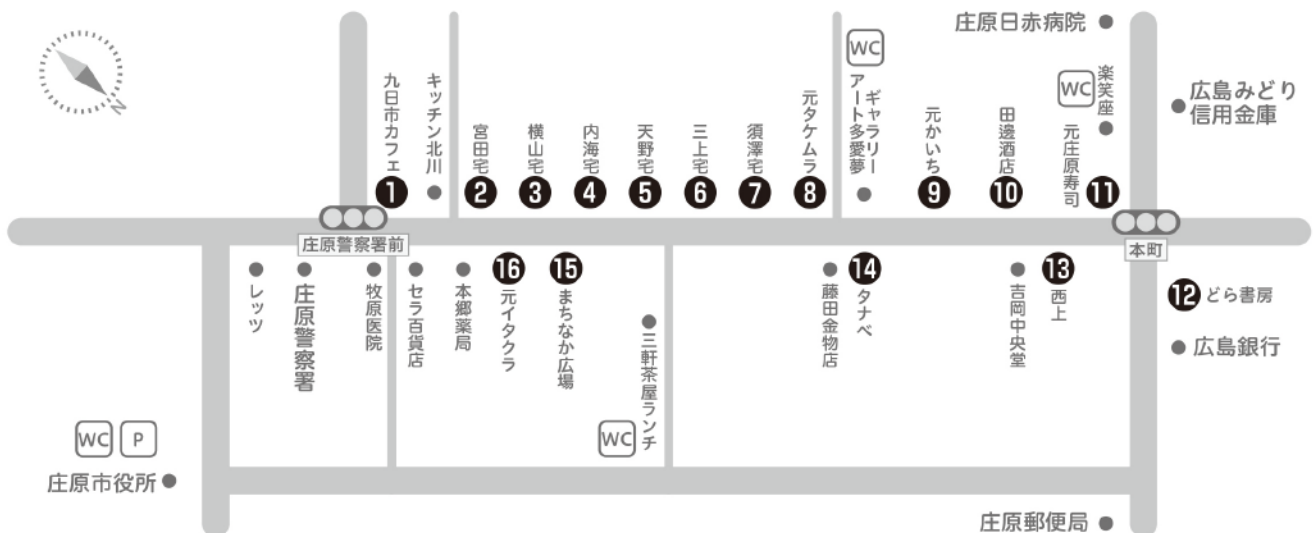
➡ 10/4(木)～10/10(水)は臨時休業日です。

★風龍

➡ 九日市スペシャル！餃子200円！

★楽笑座で「うた声喫茶」開催中。

## 出店配置図



① お休み

② タラワーフード

③ 昭助  
とらぢ  
二八そば加工所  
アーミッシュ  
さだっさ  
佐藤食販  
健康企画グループ

④ 郷屋  
832gの奇跡

⑤ ちくちくはうす玉手箱  
工房アム  
かぐや姫  
⑥ Room of Keiko  
めだかの学校  
やまのおみやげや  
三日市張子

⑦ お休み

⑧ 開盛社  
渡邊農園

⑨ お休み

⑩ お休み

⑪ お休み

⑫ お休み

⑬ 山本水産  
くんえん工房 香豚  
ハナビラタケ広島

⑭ まなべ商事

⑮ 田崎屋  
砂田海産  
佐藤園芸  
珈琲屋スプレモ  
宮川屋  
吉備路FF花田

⑯ お福  
どんぐり〜ず

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

